

子母澤寬全集四

父子鷹

編集委員 司馬遼太郎 尾崎秀樹

講談社

子母澤寛全集 4

父子鷹

昭和四十八年二月二十四日 第一刷発行

著者 子母澤寛

装幀者 辻村益朗

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号 一一二

電話 東京(〇三)二二二六代表 振替 東京三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大製株式会社

一一〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえ致します

© 梅谷龍一 1973

0393-251549-2253 (0) (企)

子母澤寬全集第四卷

目次

父子鷹

油堀	二
昨日と今日	一六
信濃	二
強請侍	二六
三ぐずり	三〇
浅間のけむり	三五
亀沢町	四〇
螢	四四
みろく寺	五〇
おんな	五五
夏の月	六〇
七転	六五
檻	七〇

八起	七五
木劍	八〇
天の川	八五
亥の日講	九〇
裏だな神主	九六
納戸の中	一〇一
雪の夜	一〇六
白梅	一一〇
じりじり照り	一二六
喧嘩劍術	一二三
登竜	一三五
かげ富	一三〇
女行者	一三六
ごろつき	一四一

裸詣	二二
犬	二七
鳶の子	三三
清境	一七
青雲	一九
隱居	一七
刀劍講	一八
浮世	一七
流水	一七
縁台	一七
春濃く	一六
性根	一五
横十間川	一五
ところ	一四

夏涼	二七
男	三三
地退 じだ ち	三七
脂照 あぶらでり	三三
仮宅喧嘩	三七
風かおる	三四
遠雷	四七
遊山無尽 ゆさんむじん	五三
爽秋	五七
切見世	六三
固唾	六八
御用達	七三
天の理法	七八
新栗	八三

慾の顔	二八
鯛	二九三
塵芥 ちりあくた	二九八
附懸 つけが け	三〇三
宅番 たくばん	三〇八
羅紗羽織	三二三
知行所 ちぎようしよ	三八
山茶花 さざんか	三二三
木曾路	三八
御願塚	三三三
御紋服	三三八
御肴	三四四
白い椿	三四八
侍の最後	三五四

気合	三九
木綿一反	三六
他行留 たぎょうどめ	三六
雲雀 ひばり	三七
御見舞	三八
死場所	三八
庭作り	三九
甲州神座山 じんざ さん	三九
垢離場 こりば	四〇
足懸り あしがか	四〇
青柿	四一
新堀端	四一
仲之町	四二
味噌汁	四三

我儘	わがまま	四三〇
町の師匠		四三五
馬方蕎麦屋		四四一
栄枯		四四六
気絶		四五二
江戸人		四五五
騒乱の世に		四六一
解説・尾崎秀樹		四六七

父
子
鷹

油 堀

まだ夜は明けない。霧が一ぱいで初夏の匂だけがその中からつーんと感じられる。

勝小吉は樺色の肩衣をつけ、袴の股立を高くとって、その霧の中を飛ぶように駆けている。深川油堀の家から、小石川御薬園裏の小普請御支配石川右近将監の下屋敷まで、遅くも六つ半までに着かなくてはならない。

ここへ着いて夏でも冬でも、玄関の板の間に坐って平伏して御支配のお城へ登るのをお見送りするのだ。夏はいいが、冬は寒風の吹きッさらし、慄える仲間が昨今十五人いる。

右近将監がすうーっと前を通る。言葉をかけるところか、見向きもしない。しかし小吉だけは近頃になって二度声をかけられた。

「どうだ」

「ははっ」

板へ額をすりつける。それだけでも仲間の義望は大変である。風の日も雪の日もこうして二年も通いつづけて未だに一回のお声がかりもないものが凡そである。

二度から三度目のお声がかりになってはじめて奥へ通され「逢対」という事になる。小普請ものの御番入即ち就職のこれがたった一つの道である。

将監はもう六十を越したい年だが、新規抱えの若い妾にうつつを抜かして、表二番町の上屋敷から、些か保養と称してこのところずっと下屋敷住居をしている。十五人が暗い中から板の間に坐っていても将監はぬくぬくと妾とねているのだ。

この朝小吉が着いた時、用人小林が小さな声で耳打ちした。

「勝、今日は三度目のお声があるぞ」

「は、有難い事にございます」

「わしも及ぶ限り尻は押すが随分うまくやれ」

「はっ」

もう将監登城の刻限近く、小林があたふたと奥から出て来て、

「勝、御召である」

といった。みんなはつとした。その燃ゆるような目に送られて奥へ入ったが、やがて将監のうしろに従って出仕を送って出て来た時の小吉の顔は、さっきとは人が変わったよう

に眼が吊上って少し蒼ざめていた。

深川へ戻る途中でぽつぽつと雨になった。その雨の遠い彼方に鶴鶴らしい野の鳥の鳴声が聞えるが、小吉は傘もなく、腕組をして、往来ですれ違う人の顔も見ず、早足で歩いている。

「笑わせやがる。いくら実父が金持でも、おやじはおやじおれはおれ、四十俵取りの小普請に五百両などという大金がどうして出来るものか。御番入がしたい故、二年この方一朝も欠かさずこうやって通い詰めたがおれはもう嫌やになつた」

ひとり言の耳に、

「あ、もし」

二度目にやつとそれが入って、小吉が振返つたのは永代橋の丁度真ん中。

「わたしをお呼びですか」

「あ、やっぱりそうでございました。あなた様でございました」

「ああ、あなたはあの時の神田の——」

「はい、黒門町の紙屋のせがれ長吉でございますよ」

「これはお見それ申して済まなかった。あの時は本当にお蔭で助かりました」

對手は黙って傘をさしかけて、

「やっぱりあなたは御武家様でございましたね。どうも唯の乞食とは思われませんでしたよ」

「お聴しい始末」

年をとった女の方と、きりリッとした美しい娘の三人づれ。小吉は一礼して、

「お連れがおありのようですから改めてお目にかかります。確か村田さんと」

「はい、あれは、この度縁あってわたくし家内に迎えますもの、あちらはそこのおふくろ様でござります」

言っているが小吉はもうとつと歩き出していた。

「もし、それではこのお傘など」

しかし答えもなく小吉はすでに駆け出していた。

「まあ何というお人でござりましょう」

娘は少し不機嫌に、

「あの方は乞食をなさってお出でなのでございますか」

「わたしが伊勢へお抜詣をした時に相生の坂であの方が乞食をしているのとお友達になりましたね。その時のお話に養子先きのお祖母が余りいじめるので癪にさわって家を抜出して来たが、浜松の御城下で道中の胡麻の蠅に逢ってお金は固より着物も残らず持って行かれ、襦袢一枚に縄の帯、ひしゃくを一本、この姿にお成りだといってお貰いをしていました。あれはお互に十四、丁度四年前の話でしたっけ」

「あなたも乞食をなされたのでございますか」

「抜詣でお金もなし、いい修行になると思いいわたしも一緒に暫く乞食をやりましたよ。大神宮の御師さんで章太夫と

いう人がありますね、二人でここへ行って江戸の品川の青物屋だといっていやもう世話になりました。今の世には珍しいようないいお方でした」

「さようでございますか。乞食をなされたのでございますか」

娘は眉の濃い大きな目をばちばちしながらそういったきり、ぶいと横を向いて終った。

「お糸や、そうした修行はこの世の中の裏も表も見ます故、知らず識らず長吉さんの身のお為めになっているのでございますよ」

おふくろがいったが、お糸は、

「乞食までしくもいいと思いますっ」

切口上にいってこつちを向こうとしなかった。

小吉が油堀へ戻った時は、雨だというのに実父の男谷平蔵は熊井町河岸前へ投網に行つたといつて留守であつた。

「おやじもああい人だ、真逆、そんな金を出して迄はいわないだろう」

小吉は同じ地内の自分の住居の方へ戻つたが、養祖母へもやがて妻になる二つ年下のお信へも、今日の事については一言もいわなかった。

その夜は篠をつくようなひどい土砂降り。

小吉は、大きな眼を見張つて隣きもせず、息をつめてじつと実父平蔵の顔を見詰めている。

「川も澄んでばかりはいない。濁る事もある。今は丁度そ

ういう世の中だ。お前はまだ子供の時分、屋敷の池へ入つて泳ぐので、いつも水を濁らしては、わしに叱られた。

が、どうだ、池の水はその時は濁つてもお前の成人と共に近頃はもう濁る事もなく、あのように澄んでいるではないか。な、今、五百両出してもお前が御番入をしたなら、親類縁者に鼻も高く、後々は結局水も澄んで、ああい事をした、これは安いものだったという事になるのだ。これが人間の世渡りだ」

平蔵はそういつて、

「明朝早速金子をお届け申すがいい」

「真つ平です。わたしが御番入をしたいのは何にも自分の為めにではありません。將軍家に命がけて御奉公を申上げ、それが取りも直さず、みんなの幸福の一端になると思うからです」

「はつははは、お前は今年十七歳だったなあ。若いなあ。しかし、お前のいう事は間違つてはいないが、とにかく御番入が第一番の事だ。それが出来なくては御奉公も何にもないであらう」

「いいえ、もう、わたしは諦めました。生涯小普請で結構です。そんなこと迄して御番入をしてもあんな石川右近將監などというものの下役で御奉公の出来る筈もなし、またこのからださえにおい染みるような気がしてなりません。あんな人間のところへよくも二年が間も通いつづけたものです」

「わからぬ奴だ、今はそういう世の中だと言っているではないか。何事も賄賂次第、利口な人間は巧みにそれを利用してそれによって自分の地位を築いて、その時はじめて將軍家のために真の御奉公を申すのだ。舞台へ上らんで芝居が出来るか」

「何にも彼も嫌やです。わたしは今日まで父上だけは、そんな事をおっしゃるお方ではないと思っていました。みんなその賄賂を持って行けといっても、父上だけは止せ、大切な天下の御職を金で買うような事は止せとおっしゃって下さると思っていました」

「まあいい。どちらにしろ今夜一晩ゆっくり考えてみる」小吉はむかむかした胸を両掌で押さえるような恰好で自分の住居へ戻って来た。小吉が泳いでは父に叱られた油堀から水をひいた大きな池の向側に、離れのような一構えである。

実父男谷平蔵の用人利平治が小吉のうしろから傘をさしかけてついて来た。小吉は、実母が中風にかかり、その上早く亡くなって、子供の時からこのじいやに育てられたようなものである。

「若様よ、あなた様強情をお張りなさるは宜しくありませんよ。これ迄、御実家様が御支配は固より頭取衆ばかりか、あの小林という用人の末にまでどれ程のお金をお費いなされたか知れませんか。でございます。御支配様は、手遊びの方があって二年も三年もお通いなさっても、蔭へ廻

ってそつとお金をお使いなさらなくては一度のお声がかりもないのでございます。それをあなた様、二年そこそこで御番入のお話が出るのなどは、みなみな御実家様のお力。御恩を有難い事に思召さなくては罰が当たります」

小吉は、きつとした。

「利平治、お前、ほんとにそう思うか」

利平治おやじは、暗い中で、じつと小吉を見ながら、

「ははは。と申しませえでは、わたくしの役目が立ちませぬ故申しましたが、実は」

「実は？」

「嫌やなことでございますよ。賄賂で天下の御役をどうこうなど、誠に以て不都合千万、この利平治なら頭から断りますでござります。若様、いやもう石川右近將監など申す人間は、尊い徳川の御家を喰いつぶす獅子身中の虫といふものでござりますよ」

「そうか。よし、おれは明朝と言わず、今夜、改めてしかと実父へ断りを申そう。実に御政道は腐り果てている」

「御実父様は人一倍お骨の固いお方なのでございますが、勝家という微祿な御家人の御養子になられた若様可愛さの余りに、ああした事をなされます。若様が飽迄も頑張りなされたら、表へは何んといかめしゅう申されても内心はお喜びかも知れませぬよ」

「ほんに、そうであって呉ればいいが」

「いえもう、それに違いありません。しかし何んでござり